

道徳科授業の質の向上を目指して
—授業改善と校内組織への働きかけを通して—

筏井 隆平

(教職リーダーコース E223C001)

第 I 章 研究の背景

道徳教育や道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養っていくことである。道徳性とは、道徳的行為を可能にする「生きて働く道徳性」とも言えるだろう。

中央教育審議会（2016, p.224）では、「他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考え、議論する道徳』を実現することが、『主体的・対話的で深い学び』を実現することになると考えられる」と示された。「生きて働く道徳性」を育てるために、道徳科授業の質的転換が求められており、従来よく見られた「『読み物教材の登場人物の心情理解』に偏ったり、分かりきったことを言わせたり書かせたりする指導」（文部科学省, 2017, p.48）ではなく、児童自身が様々な問題をわが事として捉え、主体的に解決する学習、つまり、実効性の伴う学びへと質的転換を図っていく必要があるといえる。

2 勤務校の状況

道徳科授業への意識について、勤務校の状況を知るため、道徳教育推進教師に聞き取り調査を行った（2022年6月）。その中で、以下の点を把握することができた。

- ・教材研究の時間が取れず、指導書どおりの指導になっている。
- ・教科書会社の年間指導計画を使用しているため、教科書の並び順で授業を進めている。
- ・校内研修等で道徳科に関する研修や共有の場が十分に作れていない。

また、2022年度の1～5学年の児童を対象に、道徳科授業への受け止めに関するアンケート調査をした（2022年7月）。多くの児童が肯定的に受け止めている一方で、「道徳の授業で学んだことを、普段の生活の中で生かしたことはありますか」の質問に対し、2学年から5学年で、「よくある」の割合がそれぞれ30%程度となっている。道徳科での学びと実生活とが結びついていないことが原因だと考える。

以上より、勤務校の課題を以下の3点にまとめる。

- ①指導書中心の指導に疑問を持ちながらも、児童の実態に合わせた指導を行うことができていないこと。
- ②「生きて働く道徳性」を培うためのカリキュラム編成が不十分なこと。

③道徳科についての適切な研修の場が設けられていないこと。

第Ⅱ章 研究の目的

本研究の目的とは、校内研修や自主的な勉強会を活用し、1単位時間の道徳科授業の改善と、複数時間・複数価値、他教科・他領域、家庭・地域を関連付けたユニット学習の編成の開発・実践を行い、道徳科の授業を中心に道徳教育の質の向上を目指していくことである。そのための具体的な取組・考え方に関わる理論として、東京都教育委員会（2021）、田沼（2020）、栃木県総合教育センター（2020）の先行研究を参考に、以下の3つ手段を進めていく（図1）。

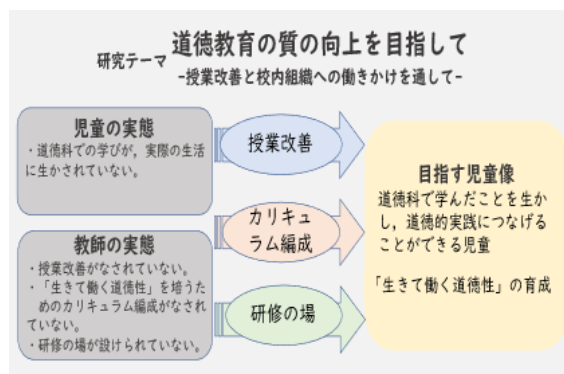


図1：研究の全体構想

第1に、「教材分析シート」を取り入れ、教材研究を深め、1単位時間の道徳科授業を充実させる。第2に、道徳科での学びを、他教科・他領域、家庭や地域につなげるためのカリキュラム編成に取り組む。第3に、「研修の場を構築」することである。既存の校内研修だけでなく、OJTに視点をあてて、自主的な勉強会に取り組んでいく。

第Ⅲ章 研究の方法

1 自主的な勉強会を活用した道徳科授業づくり

自主勉強会を設定し、「考え、議論する道徳」への授業づくりの場となるよう、筆者自身がコーディネートしていけるようにする。内容項目分析や教材分析を深めるために、「教材分析シート」を使用し、内容項目や教材について、多面的・多角的、あるいは、批判的に捉えなおすことで、指導書に頼らない教材研究の仕方や授業展開につながり、「考え、議論する道徳」へ転換していく手立てになるのではないかと考える。

2 校内研修、自主勉強会を活用したユニット学習

年間1、2回程度、時間を割いてもらっている校内研修と、自主勉強会の2つの場を活用し、複数時間からなる単元を設定したユニット学習（田沼、2020 参照）を広めていく。ユニット学習の実践の様子（筆者が2022年度に行ったもの）を紹介したり、実際にユニットを作ったりするなどの研修を行っていきたい。そして、可能な学年は実際に実践までつなげていく。その成果を自主勉強会で紹介する機会を設けることで、実際に取り組んだ

学年，教員からそのよさが広がり，さらに広がっていくこともあるだろう。

第IV章 予備的实践 ユニット学習（2022年度）

1 4年生でのユニット学習の実践

「よりよい友達関係，よりよいクラスを築くために大切なことは何だろう？」というテーマについて，ユニット学習を実践した（図2）。ユニット学習実践後，「いつもの道徳の授業と比べて，どうでしたか」との質問をしたところ，全体の2/3近くの児童が「5 いつもより深く考えることができた・4（「深く」と言い切るまではいかないが，いつもよりは考えられた）」を選択しており

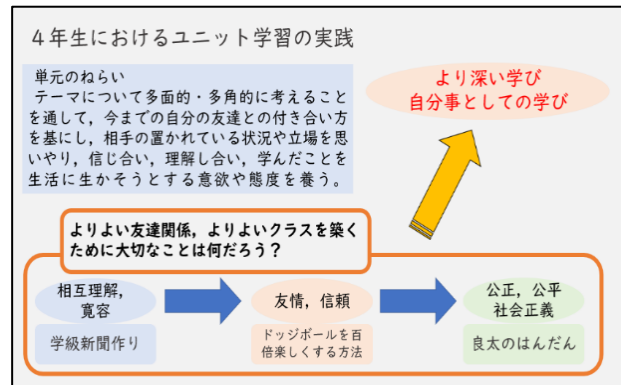


図2：4学年のユニット学習（2022）

ユニット学習が一定の効果を挙げたといえるのではないかと考える。

第V章 予備的实践 自主勉強会（2022年度）

予備的实践では，自主勉強会を5回実践した。自主勉強会の設定により，道徳科について話し合う場を提供し，教員同士の交流の場となった。参加者の中には，自主勉強会を通じて学年での話し合いが増えたという好意的な意見もあり，内容に関しても一定の効果があった。一方で，課題も見られ，取り上げる内容によっては予定時間を超えることがあった。また，本実践では先生たちのニーズを考慮しながら内容を設定していく必要がある。

第VI章 2023年度の実践 授業改善・カリキュラム編成へのアプローチ

1 教材分析シートを活用した授業改善

筆者自身の実践では，教材研究を深める手立てとして「教材分析シート」を一貫して使用してきた。加えて，校内研修や自主勉強会でシートを紹介し，実際に活用したことで，2名と少数ながらも使用する教員も出てきた。2023年度2学期より，これまで使用していたシートを改編し，教材研究の段階から，一つの内容項目に絞るのではなく，関連するであろう内容項目についても意識することで，より深い教材研究につながるのだと考えた。

2 カリキュラム編成の工夫

1学期の授業実践を経て，2学期に，「カリキュラム編成につなげるユニット学習」によ

って学習内容の充実を図った。具体的には、4時間扱いの「助け合う、思い合う、支え合う」クラスのクラスのためには何が大切かをテーマとしたユニット学習を計画した（図3）。ユニット学習実践後に、一人一人に「ユニット学習のテーマは何だったのか」を考えさせた。多くの児童が「助け合う、思いやる、支える」といった言葉を見出している。4時間続けて考えてきた授業の中に、そのようなつながりが見えたのだとわかった。

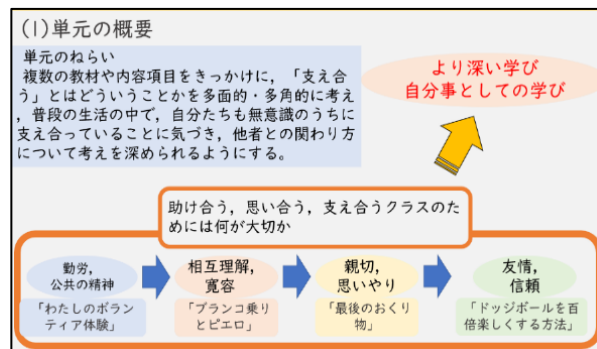


図3：5学年のユニット学習

3 校内研修，自主勉強会の実践

校内研修全体会（6月12日）において、道徳科授業を進めていくうえでのポイントの共通理解を図った。校内研修終了後、若手教員（経験年数10年未満）に感想を聞いてみると、「模擬授業をしてもらったことで、考え、議論する道徳のイメージがつかめてよかった」「楽しい道徳を自分も考えていきたい。自主勉強会も参加してみたい」といった発言があった。このことから、道徳科授業への共通理解を図ることができたと考える。

第七章 まとめ

1 研究の成果

本研究が、教員の意識や児童の変容につながったのかを検証する。ここでは、勤務校で道徳科授業を行っている10名の教員とユニット学習を実践した5学年、6学年（2023年度）の児童（83名）を分析対象とする。教員は、実践途中（2023年6月）と実践後（2023年12月）の2回調査した。児童については、2022年度の1～5学年を対象に2022年7月と2023年12月とにアンケートを実施したが、上記2学年についてはさらに1回多く実施している。5学年については、4学年時に筆者が予備実践として実践したユニット学習の成果と課題を検討すべく、2022年12月に実施した。6学年については、2023年11月に、ユニット学習の成果と課題のみに対するアンケート調査を実施した。

(1) 児童の変容

- ・5学年児童のアンケート調査では、質問項目「道徳の授業は大切だと思いますか」で、「思う」の割合が増えた。
- ・他教科・他領域、学校行事等と、意図的・計画的に関連させることで、児童の考えが

深まり、実践意欲の向上につながったことが、児童の振り返りからわかった。

- ・6 学年児童では、ユニット学習について、90%近くの児童が肯定的に受け止めていた。

(2) 教員の変容

- ・道徳科への悩みや課題が、若手・中堅教員を中心に 1 回目の調査よりも減った。自分なりの授業作りへの手応えを感じたことで、悩みや課題が軽減されてきた。
- ・道徳科で工夫したいことについて、1 回目と 2 回目のアンケート結果を比べると、「考え、議論する道徳」へと授業展開へと工夫していこうとする意識が芽生えてきた。

2 考察

(1) 実践、研究の成果

第 1 に、教材研究を深める手立てとして「教材分析シート」を作成し、自主勉強会で活用した。教材研究を深めることが、指導書に頼らない授業づくりにつながった。第 2 に、ユニット学習によるカリキュラム編成である。4 学年、6 学年、筆者の担任する 5 学年の 3 学年での実施にとどまったが、アンケート調査や学習の振り返りで分析した 5・6 学年の受け止めから、効果を挙げたと考える。第 3 に、校内組織を活用した研修の場の工夫では、自主勉強会での働きかけが一定の効果につながったのだと考える。「教材分析シート」を使っての内容項目分析、教材分析、発問づくりといった取り組みが、一部の学年・教員であっても、授業づくりに活用され、一定の成果を挙げることができた。

(2) 課題と今後の取り組み

第 1 に、ユニット学習への取り組みである。今後もユニット学習を実践し経験を蓄積していくこと、そしてそれを共有していくことが必要になる。第 2 に、教材分析シートのさらなる改善である。利用している教員がまだまだ少ないことから、省略できそうな部分や、レイアウトの工夫、簡潔さ等、使いやすさを改善する余地はあるのだと考える。

引用・参考文献

田沼茂紀（2020）問いで紡ぐ 小学校 道徳科授業づくり，東洋館出版社。

中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）。

東京都教育委員会（2021）令和 3 年度 教育研究員研究報告書 「特別の教科 道徳」。

文部科学省（2017）道徳教育の抜本的充実に向けて 道徳教育指導者養成研修ブロック説明会 行政説明資料。